

北京を訪れたことがある人であれば、だれもが一度は「胡同」と「四合院」という言葉を耳にしたことがあると思う。「胡同」と「四合院」は北京の風物詩の一つとして七百年以上も北京の町並みにその姿を留めている。しかし、北京オリンピックを機に、これらの昔懐かしい家並みや通りが消えつつあり、北京は大きく姿を変えようとしている。

中国元の時代、帝都を北京に定めた後、厳密な帝都整備計画や大規模な建築が行われた。道路に関して言うと、幅二十四歩(約三十七呎)を「大街」、十二歩(約十八呎)を「小街」、六歩(約九呎)を「胡同」としている。「胡同」は元の世祖フビライの故郷モンゴルの言葉であつたらしい。帝都が整備された当時、街の様子は整然としていたが、明代以降道路建設の規定がほぼなくなり、現在のような手を横に伸ばせば両側の壁につくぐらいの狭い路地(胡同)が数多く作られたのであつた。

「胡同」と同時に建設された、もう一つの古き良き北京を代表するのが「四合院」である。「四合院」の「四」は東西南北の四方を表し、「合」は取り囲むという意味

## 北京風物詩



久場 未雲

である。「四合院」は南北を中軸に南北の家屋や東西の家屋が対称的に建てられ、真ん中に庭を囲む建築法である。北の家屋を「正房」、南の家屋を「倒座房」、東西の二つ家屋を「廂房」と呼ぶ。

一般的な四合院は、各部屋が独立しておのり廊下でつながっている。「正房」には年長者が住み、「東廂房」には長男の家族が住む。残りの部屋にはほかの子供が長幼の順で住んだ。渡り廊下を通じて互いの部屋に行き来ができ、何かあればすぐ助け合えるところが「四合院」の魅力であつた。

人々の生活ぶりやそのぬくもりを映し、人の心までつないでくれるあの「胡同」や耳を澄ませば隣の部屋の話しも聞こえてくる「四合院」が、経済開発という名のもとに、今消えつつある。それは、私たちのこの沖繩でも同じである。昔ながらの赤瓦の家は観光名所やカレンターでしかお目にかかれぬ、青い海も埋め立てられ失われていく現状がある。経済も発展も確かに重要である。しかし、失われて取り返しつかないもの大切さを、北京の古い町にたえず「胡同」と「四合院」は静かに訴えているような気がする。

(会社代表)